

国際化の進む日本で「KARAOKE」の看板は大丈夫か。

憚（はばか）りながら申し上げます。皆さんは今のカタカナ語の乱用をどう思われますか。いまいちピンとこないカタカナ語の数々。会議や講演の中で耳にするたび、どうして日本語で言ってくれないのかと感じていませんか。つまり、これはその表現が日本語にはないのか、という違和感である。政治家の発言やニュース番組でも耳にするということは私などが思っている以上には市民権を得ているのかも知れませんが、それでも、「広辞苑（国語辞書）に載っているのか！」と、大声をあげたくなるのは私だけでしょうか。

そうした私ですが、「メリット・デメリット」をいちいち「損得」と言い直せとか、からむつもりは毛頭ありません。しかし、「コンセンサス」「エビデンス」「サスティナブル」をそれぞれ「同意」「証拠」「持続可能な」と言うことで困る人でもいるのでしょうか。逆に今、「サスティナブル」と入力したら「指すティなぶる」と誤変換しました。コンピューターの方が困ってます。「ダイバーシティ（多様性）」は誰が何と言おうと「潜水夫の町」ですよ。広い世界にはそんな町の一つや二つはありそうな気がしませんか。

国際化がますます進む中で、カタカナ語を使うことが時代のニーズ（あっ！つい使ってしまった）に合っているとお考えの方も多いかも知れませんが、私なんかは気が小さいんで、正しく使われているのかとつい心配になります。1970年に発売されたキング・クリムゾンの「In The Wake Of Poseidon」の邦題は『ポセイドンのめざめ』ですが、名詞の“wake”は「航跡」、”in the wake of”は「…のあとに続いて」の意味なのに、動詞“wake”（「目覚める」）からの誤訳タイトルです。欧米人に同タイトルのCDを見られたら笑われるかも知れません。急いで隠しましょう。もう一つ言うなら、日本人はローマ字表記をカッコいいと思いがちなので、町でたまに「KARAOKE（カラオケ）」などという看板を見ますが、欧米人が読むと「キャリオウキ」になるそうですよ。ローマ字表記の乱用も少し恥ずかしくないですか。

長くなりますが、ここで古典文学に関する著書も多い竹西寛子さんの「時のかたみ」（1984年刊）からの一節を引用します。「私は、『おもう』という言葉が好きである。音感もいい。いつでも考えつくしてこの言葉を使っているわけではないが、用い方によって、意味を限ることも、いくつかの意味を重ね合わせることもできるのがいい。『おもう』には、『考える』『思索する』『判断する』などの意味から、『なつかしむ』『恋う』『悲しむ』『悩む』『感じる』などの意味までがふくまれる。『考える』と言ったのでは『感じる』はしめ出されてしまうし、『感じる』には、『考える』の入ってくる余地はほとんどない。それに比べると、『おもう』におさまる心の領域はずっと広く層も厚い。つまり、『おもう』は、器の大きな言葉だと思う」また、こうも述べています。「人の生きようと言葉づかいは切り離しようがない」と。

さて、私は広い世界で日本語だけが「器の大きな言葉」だとは思いませんが、流行すたりのあるカタカナ語やさほどに意味を持たないローマ字表記の乱用を恥ずかしいと思う感覚は間違えだとも思えません。繰り返しますが、「『キャリオウキ』って、何」と欧米人に尋ねられたら困りませんか。

令和4年9月13日

大村城南高等学校長 中小路尚也